東京大空襲体験記

吉田和子（行田団地・61歳）

昭和二十年三月九日

この日は、祖母の一周忌の法事の日であった。戦時中の事なので簡単な法要を営み、いつもの様に床に就いた。

その頃は、夜寝るのも洋服のままの姿で、足にはゲートルを巻き、まくら元には救急袋、防空頭布を揃え、すぐ活動出来る姿でふとんに入るのだ。それは、十九年秋頃から、毎晩の様に東京のあちこちに敵機の襲来を受ける様になり、その度に起きていたからだ。何日寝間着を着なかったろう。

その夜も床に就いて間もなく、警戒警報のサイレンに目がさめた。すぐ外に出て何か所かにある防水桶の氷をたたいて割る。それから家の中に作ってある防空壕へ入るため、たたみをあげる。

三月の上旬といえばまだ寒い。その上こわさも手伝って防空壕の中では、いつも震えが止まらなかった。当時三才の弟は、大好きなキリンのぬいぐるみをかかえ、じっと姉に抱かれている。一才にならない妹は、母の背中で泣きもせず、眠っていた。早く敵機が去る様に、何事も起こらない様にと、心の中で祈っていた。やっと解除の合図、今夜も無事に終わったと、ほっとして冷たいふとんに入り、うとうとしたとたん、再び次のサイレンが…（毎晩こんな事の繰り返しなのだ。）

二度目の解除のサイレンがなり終わり、間もなく、するどい爆音が聞こえてきた。きっと味方の飛行機だろう。と思っていたとたん外がパッと明るくなった。焼夷弾が落とされたのだ。母と姉は危ないと察し、幼い弟と妹を互いに背中に背負い、頭には、お鍋をかぶせた。

私の家は、今も同じ所に住んでいて薬局をやっているが、大島五の橋のそば、歩いて十分位の所に亀戸駅がある。父は警防団と言って、自分の家だけでなく、町内の警防にあたるという組織の団長、常に隣近所の見回りをしていて、殆んど家には居なかった。

その日も相変らず姿が見えなかったが、外から戻り顔を見るなり、今夜はいつもより危険な状態にあるので逃げるよう、母に命じた。行く先は、葛飾区立石にある親戚で落ち合うと、互いに約束し、母と姉、幼い弟妹を先に逃がした。

当時私は女学校四年生（十六才）、すぐ下の妹は女学校一年生、その下の小学校四年の妹は学童疎開で山形県の米沢市に行っていた。

私とすぐ下の妹は、リュックの中に持って逃げられる荷物をまとめていた。そのとたん、二度目の爆音に続いて、「サッー」「ズドン」「シュー」と何とも言えない音が聞こえた。と、同時に表の道路が明るくなった。二、三メートル間隔位に、いや、付いている所は一平方メートルに、何本もの焼夷弾が火を吹いていた。はっと思い、二階の自分の部屋へかけ上がる。

そこにも弾は、二、三発落とされていて、すでに障子に火の手があがっていた。物竿場に置いてあったバケツで、二、三回水をかけたが、そんな少量の水では消えるはずもなく、火はどんどん燃えあがっていった。

机の中からわずかだが、自分の小使いを持ち、下にいた妹の手を取って逃げた。何を持っていこうか考えたが、何も浮かんでこない。手あたり次第、店にあるすぐ役に立つ様な物、ミルク缶、脱脂綿をリュックにつめた。今考えると、かさばる物ばかり、もっと高価な物がたくさんあるのに…。

父の姿は見あたらなかった。きっと、近所の家の火を消しているのだろう。自分の家が燃えているのに…と、父がうらめしかった。

妹の手を引いて、母達の逃げた方面へ向った。五の橋の上にかかった時、後ろを振りむくと、あたり一面どこの家からも火をふいていた。ものすごい風が吹いていて、橋の上を渡るのがやっとだった。歩けないのだ。妹と二人何度も飛ばされそうになりながら、駅の方へ向った。勿論、道路のあちらこちらに火の吹いた焼夷弾が散らばっていて、またがないと歩けなかった。

二十メートル程の広い通りなのに（明治通り）向う側の火が熱く、特に映画館の大きな建物の前はすごかった。顔はまっ赤にほてる。火が私達を追いかける。火の粉がふりそそぐ中を火のない所を求めながら、皆逃げているので、そのあとに続いた。しかし、右へ行く人、戻る人、一体どっちに火がないのだろう。

「荷物を捨てろ。」「もえた跡へ行け。」誰の声だかわからないが、声のする方に走った。錦糸町へ行くガードのそばにちょっとした空地があったので、そこで一休み。しかし、再びまわりの家が燃え始めてきた。どこへ行ったらよいのか、ただ、ぞろぞろ人の後について歩いた。走った。妹と二人お互いの背にふりかかる火の粉を手で落としながら、熱くない場所を求めて歩きまわった。走りまわった。

ふと見上げたガードの上には、火がなかったので、かけ登った。目に入った錦糸町方面は、すでに焼け野原。家は全く建ってなく、炎だけが無気味に赤く燃えていた。ほっと胸をなでおろす。しかしそれも一瞬、空襲はおさまる様子もなく、次々に聞こえる爆音。そして照明灯の光が、空をいっぱいに照らしていた。全く赤い空だった。びゅうびゅう風が吹き、火は吹きまくって、火の粉がいつまでも私達を追いかけてくる様だ。線路伝いに川の淵まできた。

我が家はどうなったのか。父や母、弟や妹はと気になった。三つ年下の妹は、私の手をかたく握ったまま、声を出さず歩いていたが、その中に涙が、悲しいのと、目が痛いのとでどうしようもなかった。二人顔を見合わせれば、顔はすすで真っ黒。川べりに体を寄せ合い、すわりこんだ。

何時間たったのだろう。あたりが明るくなって来た。三月十日の朝になったのだ。火も落ち着いてきた様子。二人で熱くない所を歩きながら我が家に戻った。堅川の川の中に、何人もの人が落ちて浮かんでいた。

家を出る時、障子が燃えていたのをこの目で見ているのに、自分の家だけは残っている様な気がした。焼けていません様に……と祈りつつ、我が家に戻ったが、やはり何もなかった。我が家も、近所の家も何もかも……無気味に煙が上がり、その中をチョロチョロと火が走っている。

家の前の城東電話局が残っていた。鉄筋のためと、川の隣で風向きによったのだろう。焼けていなかった。父がそこにいると聞いたので、中に入っておどろいた。焼けただれたケガ人でいっぱいだ。私の顔を見るなり、「くすりやだろう。薬をくれ。」と。しかし、そんな薬などどこにもなかっ

た。救急用の小さな物しか私の手許にはなかったし、そんな大ケガを手当てしてあげるすべも、子供の私には出来ず、ただ父の姿のみ探し求めていた。

焼け跡に再び立つ。きな臭いにおいのする焼け跡。まだ火は燃えていた。ここにいれば誰か帰って来るだろうと、妹と二人手を握り熱い中に立ったまま、ぼうっとしていた。何一つ残っていない。学校の道具も、最後に引き出しをあけた机も、お店の品物も、法事に使った茶わんが、お皿が焼けていくつかくっついていた。しまわずに下においておいたので割れなかったのだ。やかんも半分とけたのだろう。変な形になっていた。店の金庫だけがぽつんと立っていた。

「和ちゃん。」と言う声にふりむくと、立石(たていし)の叔父さんがそこに立っているではないか。思わず「わっ。」と声をあげてすがりつく私に、父が無事で立石の家まで来た事を告げてくれた。ふかした里芋を「おなかがすいたろう。」と手渡された。そこでやっと、昨日から何も口にしていない事に気がついたが、おなかはすいているのか、いないのか、何も感じなかった。真っ黒い手で皮をむいて食べた里芋の味、今だに忘れられない。もう昼になっているのだろうか。母の事を聞いたが、「道が混んでいるからね。」と言うだけ。母はあんなに早く家を出たのに、まだ立石には着いていないのだ。叔父さんのひっぱる自転車に手をかけ、三人ぼつぼつ歩き出した。

そしてびっくりした。昨夜、焼夷弾が転がっていた道路に、真っ黒い何かが転がっている。それは焼けて真っ黒になった人だった。半分だけ肌の色が残っている人もいた。犬も馬も死んでいた。消防自動車が焼けていた。電話ボックスに顔をつっこんだまま焼けている人。赤ちゃんを背中に乗せている人。男だか女だかわからない。頭の毛はなく、皆ぼうずだ。衣服は全くなく真っ黒い人形だ。その中を大人二つと、幼児二つ、お鍋二つある死体を探した。勿論、母と姉、幼い弟妹がいないかと…。亀戸(かめいど)駅の中をのぞいておどろいた。真っ黒い塊があちこちに山になっている。折り重なって焼け死んでいる人々だった。そこにも母らしき姿は見当らなかった。

小村井(おむらい)をすぎ四つ木(よつぎ)橋にかかる頃には、死体はなくなっていたが、ぞろぞろ歩く人で橋の上はいっぱいだった。皆どこへ行くのだろう。誰もしゃべらず、黙々と行列は続いた。

二時間近くも歩いたろうか。足が交替に前に進むだけ。そして痛い目から涙がこぼれるだけ。

叔父の家の前に来た。入るのがこわかった。そこには父がぼうっとすわっているだけで、母の姿はなかった。あんなに探したのに、どこに行ったのだろう。明日また探しに行こうか。「もうだめだよ。」と言う父。あたりが暗くなりかけた頃、「カッカ、ネエチャン。」と弟の声。見えた。母の顔が、姉の顔が、無事だったのだ。皆抱き合って泣いた。真っ黒な顔が、ますます黒くなった。顔を洗ってもすすは、なかなか取れなかった。油のまざった様なすすだった。

母達は、亀戸駅の線路のある土手にいたのだそうだ。駅の前に大きな郵便局があった。局の書類が火の塊になって、飛び散ったそうだ。「お鍋をかぶせていて、よかったよ。」と母。母の背で十か月の妹は、泣き声一つたてず、生きているのか、死んでいるのか、わからなかったそうだ。おぶいばんてんのあちこちに焼けただれた跡を見た時には、ぞっとした。それ ばかりか赤子を背負い、あの行列を歩くのは、大変だった様だ。

この立石の叔父の家で、家族七人世話になった。しかし夜になると、い

や昼でも警報のサイレンを聞くと、体は震えた。もうこわくてしかたなかった。早く東京から逃げたかった。サイレンのならない所へ行きたかった。

一週間ばかり世話になったろうか。集団疎開で山形県の米沢にいる妹のもとへと、私達一家は、東京をあとにした。

父や母が汗水流して作った財産は、一夜にしてすべて灰となり、本当の裸同様で、永年住んだ東京を離れて行くのだ。ただ親子七人、無事だった事を喜び合う姿しか、そこにはなかった。

後で聞いたが、私の両隣りの家は、全員が行方不明であった。

尋ねていった米沢の町は雪国、言葉も変わり疎開者という名をもらい、その上食料難のため、そこで再び惨めな生活が始まった。いや、その後も…。二十二年十二月、一家が東京に再び帰るまで…。

一体、誰のためにこんな目に逢わされたのだろう。二度と再び、いや、永遠に戦争なんてするべきではない。

あれから四十四年。父も母も、もうこの世にはいない。しかし、私の心の中には、昨日の出来事の様に感じ、目を閉じれば浮ぶあの地獄絵。生涯おそろしい思い出は、消える事がないだろう。

